資料８

日本ジオパーク再認定審査現地審査報告書

ジオパーク名: おおいた姫島ジオパーク
現地審査員: 平田大二 原田卓見 中村有吾

報告書は 20 ページ以内、1 つのファイルにすること（字体は明朝、文字の大きさは１１）別添は例外とする

A.　基本情報

面積	**84 ㎢**
人口	**2,103** 人（**2017** 年 **8** 月末住基人口）
日本ジオパーク認定年	**2013** 年
前回の審査日程および審査員名	町田洋、目代邦康、坂之上浩幸
ウェブサイト（**URL** を記載）	**www.himeshima.jp/geopark/**
ソーシャルメディア（すべて列記）	**-**

B.　提出書類一覧

・再認定審査現況報告書
・パンフレット・リーフレット
・現地審査に係る出席者一覧
・解説板設置箇所図
・解説板解説内容図
・世界農業遺産申請書
・各大学協定に関する資料
・ヒアリング時のプレゼン資料（大分県・小中学校）

C.　地域の地図

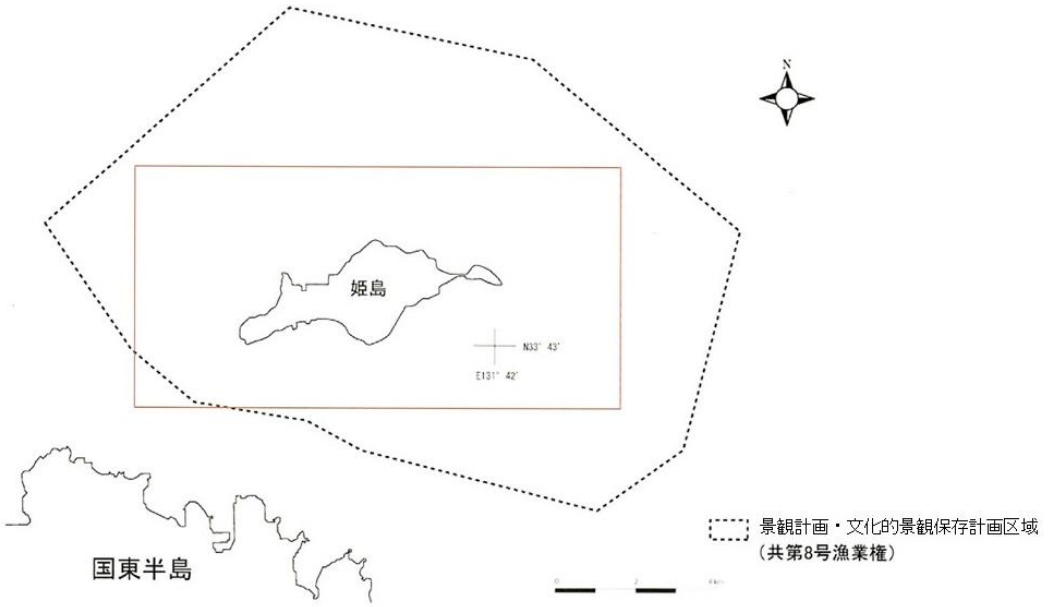


図 1. ジオパークの範囲（赤線の枠内）

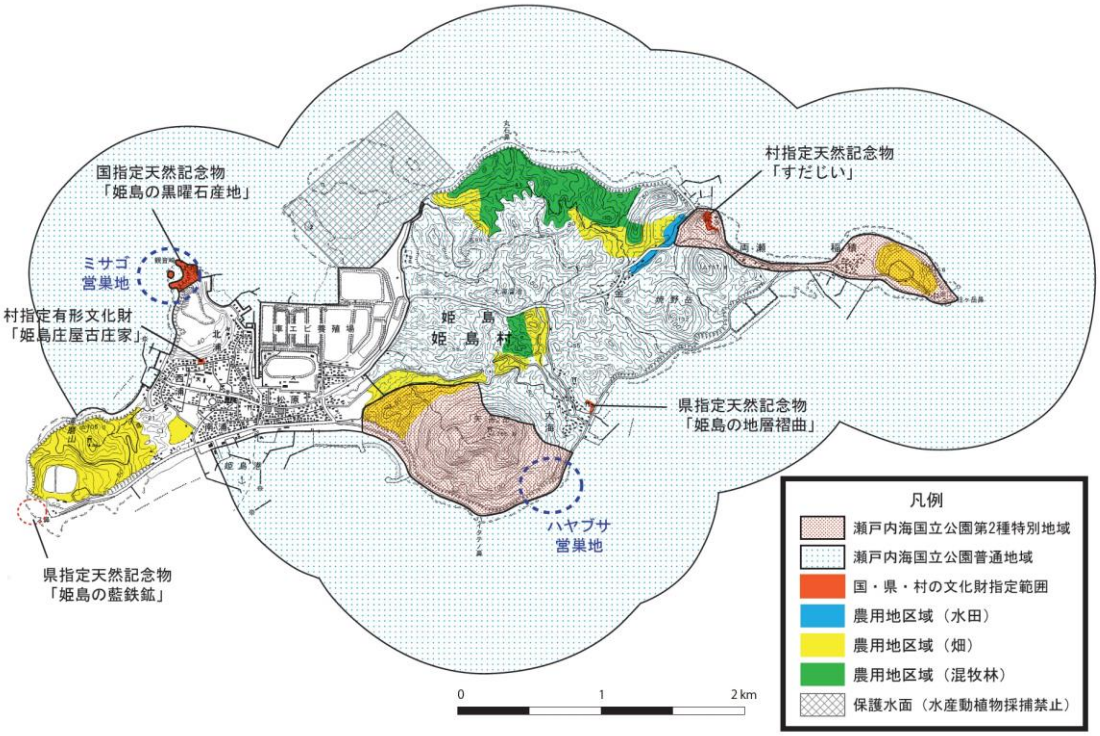


図 2. 法令規制適用区域

D.　前回の指摘事項に関する取組・改善点

指摘１：テーマに掲げた「神秘」に留意する必要がある。また、姫島の成立ちを広い範囲でとらえ、そのジオと暮らしとのつながりを説明することができていない。

分析１：姫島七不思議という言い伝えが残されているが、審査時では単なる言伝えとしてではなく、自然科学的見地に立った説明もされていた。また、暮らしとのつながりといった部分でも、案内のガイドが常に背景としての地形地質を伝えようとしており、ガイド間においてもそうした意識が共有されていることがうかがえた。ただし、姫島の成立ちを広い範囲で俯瞰して説明する部分については課題が残る。島からは国東半島がよく見えたが、そことの地質的な関連は聞くことができなかった。また、前回審査でも指摘された姫島産黒曜石の分布やゾウ化石の分布・由来、アサギマダラの渡りといった姫島以外との関連性などももっとアピールしてよい点である。専門員を中心に、より広い地域とのつながりを意識したジオストーリーづくりとガイド手法の確立にさらに取り組む必要があるだろう。

指摘２：全体のテーマとジオサイトとの関連性を分かりやすく語ることのできるガイドの養成が必要

分析２：認定ガイドは現在 9 名いるとのことだが、今回の審査では、専門員とガイド 1 名による案内だった。ガイドからは、主に島の暮らしに関してジオとのつながりを意識した案内を受けたが、前述のジオストーリーが不十分という課題もある。ガイド同士の勉強会も行われているので、さらに質の向上と平準化に努めるべきだろう。

指摘３：周遊クルーズを主要コンテンツにすべき。また、クルーズ用のガイド養成も必要

分析３：指摘を受けて、姫島と九州本島とを結ぶ村営フェリーの予備船を新たに活用して 100 人規模の団体ツアーを不定期ながら行っている。審査時においても専門員とガイドが交互に行った解説は、島の地形がよく見えることと相まって分かりやすかった（写真 1）。今後においては、料金設定を含めた観光コンテンツとしての可能性を広めていくことに期待したい。

写真 1. 村営フェリーを活用したジオクルーズ

指摘４：専門員の配置
分析４：2014 年度から、地球科学の博士号を持つ専門員を 1 名配置している。
指摘５：拠点施設の充実と解説のできる常勤職員の配置
分析５：2017 年 2 月に、「天一根」と名付けた博物館的機能をもつ拠点施設が新設され、本ジオパークの成立ちや島の歴史などが標本やパネル解説によって紹介されている（写真 2.3）。施設には、前述の専門員が常駐しているほか、受付職員も 2 名配置されて、入館者への案内も行われている。

写真 2. 新設された拠点施設「天一根」

写真 3. 「天一根」の展示室

指摘６：未設置の解説板の整備と冊子やウェブサイトなどの充実・更新が必要
分析６：指摘を受け、４つの総合案内板（写真 4）と１１のジオサイト解説板（写真 5）が整備されたほか、パンフレットとリーフレットはそれぞれジオサイトをマップ付きで紹介するものが用意されている。ウェブサイトも独立したものがある。しかしながら、解説板やパンフレット等は少ない文字量で簡潔にまとめられているものの、ジオサイトの事象を十分に伝えきれておらず、逆に、ウェブサイトではジオサイト解説が難解であり、それぞれ再度の改善が必要と思われる。

写真 4. 総合案内板

写真 5. ジオサイト解説板

指摘７：海外からの来訪者も念頭においた対応策を検討すべき
分析７：解説板とウェブサイトのトップページが英語併記となっている。他方、近年は欧米系のバックパッカーが多く島を訪れるようなっており、そうした需要に即したさらなる国際化対応が進められると良い。

指摘８：ハザードマップの整備のほか、学校教育や村民講座などでの防災教育に取り組むべき

分析８：2017 年に新たなハザードマップを作成し、村内に配布するとともに、シンポジウムや学校での津波避難訓練などの防災教育も行われている。

指摘９：ジオパーク推進協議会のメンバーが、ジオパークを島の持続的発展の手段としてとらえ、主体的に活動することに期待

分析９：推進協議会の主体性については、十分とはいえないが、専門員配置や拠点施設整備などの進展もあり、事務局主導による協議会活性化の可能性はある。県も島の主体性を損なうことなくサポートしようとする姿勢が感じられる。

E.　ユネスコ世界ジオパーク運営指針基準の検証

E.1　領域

E.1.1 地形地質遺産および保全

本ジオパークは、九州大分県の国東半島沖約 4km の瀬戸内海にある、東西およそ 7km、南北およそ 3km の火山島である。姫島は、九重火山や阿蘇火山とともに、中-北部九州の火山フロントを形成する。姫島の地質は、（1）鮮新世もしくは更新世前-中期の堆積岩、（2）更新世中期の姫島火山群、（3）沖積層、の 3 つに大別される。（1）の堆積岩は、姫島中央部付近に分布する丸石鼻層、川尻礫層、唐戸層で、姫島火山群の基盤となる。後述する「コンボリュートラミナ」や「大海の褶曲構造」は唐戸層に発達する。（2）の姫島火山群はおよそ 20 万～30 万年前ころに活動した火山で、姫島中央部の大海火山、矢筈岳火山、金火山、姫島東部の稲積火山、姫島西部の城山火山、達磨山火山、浮洲火山の 7 つの火山がある。観音崎でみられる黒曜石は城山火山の噴出物である。浮洲火山は大部分が海面下にあり、干潮時に火口縁の一部が露出する。姫島の中部～西部には（3）沖積層（砂州）や干拓地・埋め立て地がひろがる。姫島はもともと 4 つの火山島が砂州でつながったことでひとつの島になっており、姫島の中心街も砂州上にある。中心街北方の干拓地や埋め立て地は、かつては塩田として、近年は車エビの養殖場として利用されている。

ジオサイトの保全状況については、図 2 のとおり、市街地を除く島のほぼ全域が瀬戸内海国立公園に含まれているほか、農用地区域や保護水面の設定による産業規制もある。また、特に重要なサイトは国・県・村指定の天然記念物として保護されているなど、法的には十分な担保がなされている。主要なジオサイトの一つである「大海のコンボリュートラミナ」では、近年、正断層が走りオーバーハングした部分が一部崩落したが（写真 6）、露頭の図化作業を行い、その保全策を検討している。

島内の生活域はどこも人の手が行き届き景観が美しく保たれている。30 年以上続く空き缶デポジットシステムもそうした村民の景観保全に対する意識の表れだろう。アサギマダラ休息地の環境保全を長く続けていることも自然環境に対する意識の高さを裏付けている。2018 年度には景観条例も制定予定で、島全体を保護・保全する体制整備が進んでいる。

特に重要な地形地質サイト：観音崎、大海のコンボリュートラミナ

指摘事項　[有]・無

指摘事項：島南側の海食崖には、島の成立ちを知るうえで重要なジオサイト「鷹の巣」「大海のコンボリュートラミナ」「大海の褶曲構造」があるが、その多くが崖下のひめしまブルーラインと呼ぶ幹線道路の整備によって侵食が止まったことで、露頭が徐々に植生に覆われる状況となっている（写真 7）。同様の問題を抱える他のジオパークとの連携を図りながら、保全措置を検討していってほしい。

写真 6. 一部崩落したコンボリュートラミナ

写真 7. 植生に覆われている鷹の巣

E.1.2 境界線

本ジオパークのエリアは、図 1 のとおり、島を囲う東西 14km、南北 6km の方形となっている。海域を含めたのは火山地形が海底にも存在することや、そこが漁労の場であるとともに、旧ゾウ化石や藍鉄鉱が海底で発見されたことなどに基づくが、方形自体の設定には明確な根拠はない。しかしながら、周囲わずか 17 ㎞という小さな離島であるということ自体が外部に対しての明確な境界線となっており、公園（パーク）としての優位性であるともいえる。

指摘事項　有・無
指摘事項：

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

大分空港には、既存広告媒体を活用した PR 映像が流されていたほか、フェリーターミナルでも本ジオパークを紹介する案内板や歓迎看板等が設置されている（写真 8）。パンフレットやマップなども主要施設や観光店舗に置かれており、訪問者がジオパークを一定程度認知でき、周遊できる状況がつくられている。多言語対応については、ジオサイト解説板及びウェブサイトのトップページが英語併記となっている。

写真 8. 姫島港フェリーターミナル前に設置された歓迎看板と空き缶デポジット啓発看板

指摘事項　有・無
指摘事項：可視化を進めるには来訪者の視点が欠かせないが、本ジオパークのウェブサイトで紹介しているジオサイト解説は一般向けとはいえない。姫島の成立ちを西日本火山フロントや瀬戸内海の形成から見つめ、それぞれのジオサイトがそのストーリーのどこに位置づけられているかを、図やイラストを使うなどして平易に伝えることが必要である。また、訪問者が島を訪れようとする場合のウェブサイト上での情報不足も見受けられる。周遊に重要なガイドやエコカーの情報などもワンストップで収集できると良いだろう。SNS による発信も含め、ウェブ上での情報発信をさらに強化する必要がある。

E.1.4 施設・インフラ整備

展示内容やスペースの問題を抱えていた従来の拠点施設（離島センター）から、新たに「天一根」と名付けた村営の拠点施設が 2017 年 2 月に新築オープンしている。施設では、姫島の成立ちから暮らしまでが標本やパネル展示により紹介されており、バックヤードなどの博物館的な機能も備えている。施設では、ジオパーク専門員と受付職員が常駐し（写真 9）、来館者を案内する体制も整えられており、本ジオパークのゲートウェイの役割を果たしている。また、村営のフェリーターミナルやターミナル正面のレンタカー・レンタサイクル店、土産物店でもジオパークの紹介がされており（写真 10）、拠点施設を中心に来訪者を受け入れる協力体制が構築されている。

写真 9. 拠点施設に勤務する専門員と受付職員

写真 10. 観光案内所も兼ねるレンタカー店

指摘事項　有・無

指摘事項：周囲 17 ㎞の姫島を周遊するうえで、島唯一の玄関口である姫島港フェリーターミナル正面にあるレンタカー・レンタサイクル店の存在は大きい。姫島エコツーリズム推進協議会が国土交通省のモデル事業として電気自動車（エコカー）を観光客にレンタルしているが、小さい島内を低速度で巡るのは、ジオツーリズムを楽しむうえでも最適。持続的な経済活動として発展するよう、ジオパークとしてもかかわりをさらに強めていくことを期待する。

E.1.5 情報、教育、研究

島内には、４つの総合案内板と１１のジオサイト解説板が整備されているほか、パンフレットとリーフレットはそれぞれジオサイトをマップ付きで紹介するものが用意されている。

教育プログラムについては、E5 で詳述する。

研究活動については、県と連携して周辺海域の海底地形調査を行うなど、地域資源に関する調査研究を続けているほか、懸賞論文の募集や宿泊施設（離島センター）の提供、バスの無料貸出し、専門員による巡検案内などの研究者へのサポートによって、この 5 年間で本ジオパークに関する 20 の論文がまとめられている。

指摘事項　有・無

指摘事項：解説板やパンフレット、リーフレットはそれぞれ少ない文字量で簡潔にまとめられてはいるものの、ジオストーリーやジオサイトの事象を十分に伝えきれる内容とはなっていない。特に、解説板の内容については、そこで見える地形や露頭の状況をきちんと解説できていないものも散見された（写真 11～12）。難解さを指摘されたことの反動のようだが、改善が必要と思われる。他のジオパークの先進事例を参考にしながら、ジオサイトの位置付けをジオストーリーの中で評価したうえで再整理してほしい。ただし、改訂にあたっては性急に事を進めるのではなく、前回審査での指摘にもあるジオストーリーの再構築を進めるなかで、どうやったら一般の来訪者に島の成立ちや自然・文化とのかかわりなど姫島ならではのジオストーリーを理解してもらえるかの熟議を行うのが先決である。そういっ

た意味で、まずはウェブサイトの改訂から進め、その情報を QR コードなどで誘引するなどで反応をモニタリングしてから改訂するのも一つの方法であろう。

写真 11.「鷹の巣」解説板

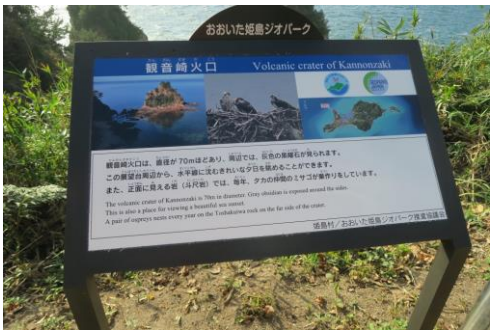


写真 12.「観音崎火口」解説板

E.2　その他の遺産

E.2.1: 自然遺産

姫島は、日本では南西諸島から北海道まで広く移動する渡り蝶のアサギマダラの休息地として知られるほか、村指定の天然記念物となっている手つかずの照葉樹林（スダジイ）などの貴重な生態系が残っている。アサギマダラは、春にはスナビキソウ、秋にはフジバカマの蜜を求めて飛来するが、地域住民が「アサギマダラを守る会」を結成し、休息地の環境整備や保全活動に取り組んでいる。

指摘事項　有・無

指摘事項：黒曜石やゾウ化石の分布と同様、広く移動するアサギマダラなども他地域との関連を語るうえでの重要なソースとなることから、ジオストーリーの中に積極的に取り入れ活用していってほしい。

E.2.2 文化遺産

古くから海運業や漁業を生業としてきた姫島では、江戸時代につくられた突堤や浮洲にたつ社、砂州地形を利用して始まった塩田製塩の煙突や運搬水路、海岸に出るための「せど」と呼ばれる家屋密集地の小路（写真 13）、塩田跡地を利用して営まれている車エビ養殖など（写真 14）、民俗・文化・歴史を伝える遺産が数多く残されており、前述のエコカーなどでジオサイトを巡るうえでの大きな魅力・アクセントになっている。そして、これら遺産の多くは、自然公園法などの保全規制のかからない島中央部に集中しているため、村では独自に景観条例を制定し、それに基づく文化的景観保存計画を策定することで、これらの保全を図ろうとしている。

なお、姫島は、国東半島宇佐地域の一地域として世界農業遺産の登録地となっているが、詳細は E.4 で述べる。

写真 13.「せど」と呼ばれる小路

写真 14. 塩田跡地を利用した車エビ養殖池

指摘事項　有・無
指摘事項：審査において、ガイドが運転するエコカーで車エビ養殖場や集落などの文化遺産を周遊した際に、ジオとのつながりを意識した解説も聞くことができたが、さらに大地の成りたちや地形を意識した解説を、どのガイドであっても深く楽しく語ることができるような質の向上と平準化に努めてほしい。

E.2.3 無形遺産

島内の集落ごとに特徴を持つ「姫島の盆踊り」は、鎌倉時代の念仏踊りから派生したものといわれ、その独特の風俗から国選択の無形民俗文化財に指定されている。この盆踊りは 8 月に行われるが、その他にも 5 月に「姫島かれい祭」、10 月に「姫島車えび祭」を行っており、それぞれ多くの観光客が来島している。本ジオパークでは、かれい祭や車えび祭の際には、無料の周遊バスを運行し、ジオパークの概要説明を行うなど文化イベントを通じたジオパークの普及啓発も行っている。

指摘事項　有・無
指摘事項：

E.2.4 気候変動および自然災害への関わり

本ジオパークの災害リスクの主なものは地震と津波だが、それらに対する具体的取組みは、E.10 に詳述する。

指摘事項　有・無
指摘事項：

E.3　管理運営

本ジオパークの推進母体は、姫島村の行政、商工会、区会、学校、産業団体の代表者などで構成する推進協議会で、事務局は村の企画振興課が担っている。運営計画は、日本認定の 2013 年度を起点とする 4 カ年の基本計画として策定し推進してきたが、期間終了に伴い 2021 年度までの新たな行動計画を策定している。

事業予算は、村と県が折半する形でここ数年は 600 万円程度を負担しており、主に普及啓発事業や小中学校の県内・県外交流経費、ネットワーク活動等に充てられている。また、この他に県が独自事業として豊後大野ジオパークへの支援も含めて主に調査研究活動を行っている。事務局員はすべて姫島村職員で、事務系は兼務が 5 人。博物館的機能をもった拠点施設には、地球科学の博士号をもつ常勤の女性専門員 1 名と受付職員が配置されている。

指摘事項　有・無
指摘事項：新たに常勤の専門員を配置するとともに、拠点施設を新設するなど、推進体制整備の進捗が認められる。今後においては、拠点施設を中心としながらも、事務局がさまざまなステークホルダーを巻き込んだマネジメントを展開することに期待したい。また、広域自治体である大分県がジオパーク活動を積極的にサポートしていることは、財政面はもちろん、多面的な事業展開をしていくうえでも効果は大きく、引き続きサポート体制が維持されることに期待したい。ただし、ジオパーク活動の基本はボトムアップであり、県の支援も主体である姫島の住民の自主的な活動が前提であることに留意してほしい。

E.4　重複（オーバーラッピング）

姫島は、「クヌギ林とため池がつなぐ　国東半島・宇佐の農林水産循環」として世界農業遺産に登録されている国東半島４市１町１村の、一区画となっている（写真 15）。当該遺産が認めるシステムは、クヌギがしいたけ生長と森林の新陳代謝、水源涵養などを促し、特色ある農林水産業を継続するとともに、多様な生態系を保全していることにある。このなかで、姫島は、国東半島沖の豊富な水産物を水揚げしているとともに、地理的な近さから生態的、社会経済的に当該遺産システムの一部としての役割をもっているが、一方でそのつながりは潜在的なものにとどまっており、具体的な保全の取り組みはあまり見られない。したがって、ジオパークとの連携も行われていない。

E.1.1 でも述べたとおり、姫島は砂州の市街地等を除き、瀬戸内海国立公園普通地域及び第２種特別地域に指定されているほか、「姫島の黒曜石産地」に代表されるような国、県、村指定の有形・無形文化財がある。こうした指定文化財のほとんどがジオサイトとなっている。

写真 15. フェリーターミナル前に設置されていた世界農業遺産の啓発看板

指摘事項　$\boxed{\text{有}}$・無

指摘事項：オーバーラッピングによる相乗効果や農業遺産との連携はあまり見られないが、農業遺産で評価している姫島の価値は、国東半島とのかかわりという点からも重要であり、今後、ジオストーリーをさらに深めていくうえで積極的に活用していってほしい。

E.5　教育活動

本ジオパークの教育活動では、小中学校の取組みが特筆される。県と連携して県内・県外ジオパークとの交流を続けているほか、県立美術館と連携した地域の石を使った顔料づくりワークショップなどは、情操や感性を醸成するうえで効果的でユニークな取組みと言える。また、中学校においてはジオパーク認定を機に、文部科学省による教育課程特例校として「ふるさと科」を新設し、フェリー乗り場に掲示するはがき新聞の作成など優れたふるさと学習を展開している。2017 年度には同校がユネスコスクールにも認定されるなど、ジオパークを ESD に活用しようとしている。今後は、子どもジオガイドの育成や小中学校における発達段階に合わせた学習プログラムづくりなどを通じて、郷土愛を醸成し情報発信できる人材の育成を目指すこととしている。

成人向けには、「ひめしま学」と題した検定イベントを続けており、住民のふるさと再認識につながっている。また、講演会活動や少人数による講座の実施により、これまでに 9 名のジオパークガイドが誕生している。

指摘事項　有・$\boxed{\text{無}}$

指摘事項：

E.6　ジオツーリズム

ここ数年の本ジオパークに来島する観光客は４万人前後とほぼ横ばいとなっているが、国東半島からわずか 20 分に位置する立地条件と島への探訪心から、観光バスによる団体客が定期的に来訪しているほか（写真 16）、近年では欧米系のバックパッカーも多く訪れるなどの変化が起きている。こうしたなか、E.1.4 でも述べたゲートウェイとなる拠点施設やエコカー（写真 17）などの周遊インフラが整備されるとともに、ジオパークガイドの案内や

旅館女将の会によるもてなしにも新たな取組みが見られるなど、今後の展開によっては地域経済に波及するような効果が期待できる。そのためには、D で述べたような地形地質と車エビに代表されるような島の暮らしとのつながりに着目したガイドが求められる。

また、村営フェリーを活用した島一周のジオクルーズは、展望地のない島にあっては地形がよく観察でき、ジオストーリーを理解するうえでも非常に有効な観光ツールといえる。

写真 16. 審査時に偶然遭遇した団体ツアー

写真 17. 2 人乗りのレンタル電気自動車

指摘事項　有・無

指摘事項：拠点施設である「天一根」をはじめ、各ジオサイトや観光スポット、各種施設などに相互に紹介できる案内情報があれば、ツアー客の導線確保が容易となるであろう。また、ジオクルーズは、現在、ジオパークの教育・普及活動として活用している割合が大きいとのことだが、観光コンテンツとしての可能性も高い。引き続きガイドの語りに磨きをかけるとともに、観光ツアーの受け皿の一つとしても検討していってほしい。

E.7　持続可能な開発

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

本ジオパークは、人口 2 千人余りの小さなエリアである姫島村一村で運営されており、運営主体は推進協議会ではあるものの、その活動は村と一体となったものである。狭小な島では農業は発展せず、近海の豊富な水産資源による漁業や海運業が生業であった。江戸時代初期から砂州の湿地を利用した塩田が営まれ、近年ではその塩田跡地を利用した車エビ養殖が特産ブランドとして定着し、島の雇用にもつながっている。仕事を分かち合いながら島の暮らしが続けられてきたが、そうしたなか、E.1.4 でも述べた電気自動車を用いたレンタカー事業が試行されているほか、ジオパーク認定後に起業した「株式会社おおいた姫島」がジオストーリーを活用した特産品開発と物販の全国展開を進めるなど、ジオパークと連携した新たな経済活動も始まっている。

指摘事項　有・無

指摘事項：

E.7.2 パートナーシップ

本ジオパークは、大分大学・別府大学・立命館アジア太平洋大学とそれぞれ学術支援や地域振興に関する連携協定を結んでいるほか、大分県信用組合ともまちづくりに関する協定を締結している。また、文書の取り交わしはしていないものの、老人クラブ連合会や婦人会、商工会、農協、漁協、特産品販売会社、大分空港とはジオパーク PR に際して、協力して出展や販売を行う体制がつくられている。

指摘事項　有・無

指摘事項：

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

地域住民のジオパークに対するかかわりは、ひめしま学などの住民学習会やガイド養成講座への参加が主なものである。村や商工会、区会、老人会、青年団、婦人会などの代表で構成される推進協議会はジオパークの推進母体で、計画の立案や事業の遂行を担っている。

指摘事項　有・無
指摘事項：本ジオパークの特徴として、県の手厚いバックアップが挙げられるが、他方、ジオパークの主体は地域住民、あるいはその代表ともいえる推進協議会構成員であることから、彼らのさらなる自主的な活動に期待したい。

E.8　ネットワーク活動

九州においては、各ジオパークが連絡会を設けて活発な交流活動を続けており、本ジオパークも県内の豊後大野ジオパークや県外のジオパークとの小中学生の教育交流を毎年行っている。また、本ジオパークの象徴的資源である黒曜石に関するネットワークにも参画し、同様の資源を有する他のジオパークとの意見交換によってそのストーリーの充実を図っている。

さらに、新設された拠点施設でも、九州内の各ジオパークに関する紹介コーナーを設置しているほか（写真 18）、全国大会などにおいても積極的な事例発表を続けている。

写真 18. 拠点施設に置かれていた JGN や近隣ジオパークのパンフレット類

写真 19. 拠点施設に掲示されていたハザードマップ

指摘事項　有・無
指摘事項：

E.9　地質鉱物資源の販売

本ジオパークにおいて、地質鉱物資源の販売は確認できなかった。

指摘事項　有・無
指摘事項：

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

本ジオパークの主な災害リスクは、地震と津波である。過去には、塩田跡地での液状化現象などもあり、住民の防災意識は高いが、シンポジウムや学校における津波避難訓練などの防災教育も行われている。また、島内にはケーブルテレビがあり、情報伝達のインフラも整備されているほか、2017 年には新たなハザードマップも村内に配布されている（写真 19）。さらには、ガイド養成講座では、ガイド時の災害対応についての机上訓練も行っている。

指摘事項　有・無
指摘事項：

F.　総括

7 つの単成火山と砂州でつくられた周囲わずか 17 ㎞の姫島は美しく、好天であれば間近に見える国東半島がその成り立ちを伝えてくれる（写真 20）。九州本島からフェリーで約 20 分の距離は、離島の行き難さよりも、むしろ旅心をくすぐる点において、パーク（公園）としての優位性と言えるのかもしれない。

島内には、ジオパークのウェルカム看板や案内板、解説板、拠点施設などが整備されているほか、県との連携による調査研究、小中学校におけるジオパークを活用した地域環境教育、文化的景観の保全、新たな観光の芽吹きなど、ジオパーク認定による環境変化が多くみられている。しかしながら、姫島の成立ちを広い視野で俯瞰し、ジオサイトや人々の暮らしとのつながりを伝えるジオストーリーは十分とはいえない。数は少ないとはいえ、定常的な団体客がありインバウンドの増加も見られるだけに、ストーリーの深化とガイドのレベルアップは、大きな効果を生み出す可能性がある。

仕事を分かち合う土壌の中でも、交通インフラの整備や新たな特産品開発と販売、土産物店が行うガイドなど、新たな動きも見えていることから、ジオパークを通じてさまざまなステークホルダーを巻き込んだ全村的な活動が、さらに活発になっていくことに期待したい。

写真 20. 島南側からは、間近に両子山を中心とした国東半島の火山地形がよく見えた。

G.　指摘事項

・提案：グリーンカード

・主な指摘事項

１．前回の指摘事項にもあるが、ジオサイトの説明が個別的で姫島の成立ちがイメージしづらい。西日本火山フロントや瀬戸内海の形成、間近に見える国東半島とのつながりなどもっと広い範囲での地質イベントを組み入れるなかで、姫島の成立ちや価値を説明するとより分かりやすく楽しく感じられるだろう。姫島産黒曜石の分布やゾウ化石の分布・由来、アサギマダラの渡りといった姫島以外との関連性などももっとアピールしてよい点である。専門員を中心にガイドと議論を重ねるなかで、ストーリーの構築と伝え方についてさらに研究を進めていってほしい。

２．江戸時代につくられた突堤や浮洲にたつ社、砂州地形を利用して始まった塩田製塩の煙突や運搬水路、海岸に出るための「せど」と呼ばれる家屋密集地の小路、塩田跡地を利用して営まれている車エビ養殖など、姫島には民俗・文化・歴史を伝える遺産が数多く残されており、ジオサイトを巡るうえでの大きな魅力・アクセントになっている。審査時には、ジオとのつながりを意識したこれらの解説も聞くことができたが、さらに大地の成りたちや地形を意識した解説を、どのガイドであっても深く楽しく語ることができるような質の向上と平準化に努めてほしい。

３．島南側の海食崖には、島の成立ちを知るうえで重要なジオサイト「鷹の巣」「大海のコンボリュートラミナ」「大海の褶曲構造」があるが、その多くが崖下のひめしまブルーラインと呼ぶ幹線道路の整備によって侵食が止まったことで、露頭が徐々に植生

に覆われる状況となっている。解決は容易ではないが、同様の問題を抱える他のジオパークとの連携を図りながら、保全措置を検討していってほしい。

4．そのジオパークのゲートウェイとなるのはウェブサイトだが、本ジオパークのそれで紹介されているジオサイト解説は一般向けとはいえない。姫島の成立ちを西日本火山フロントや瀬戸内海の形成から見つめ、それぞれのジオサイトがそのストーリーのどこに位置づけられているかを、図やイラストを使うなどして平易に伝えることが必要である。また、訪問者が島を訪れようとする場合のウェブサイト上での情報不足も見受けられる。周遊に重要なガイドやエコカーの情報などもワンストップで収集できると良いだろう。SNS による発信も含め、ウェブ上での情報発信をさらに強化する必要がある。

5．周囲 17 ㎞の姫島を周遊するうえで、島唯一の玄関口である姫島港フェリーターミナル正面にあるレンタカー・レンタサイクル店の存在は大きい。姫島エコツーリズム推進協議会が国土交通省のモデル事業として電気自動車（エコカー）を観光客にレンタルしているが、小さい島内を低速度で巡るのは、ジオツーリズムを楽しむうえでも最適。持続的な経済活動として発展するよう、ジオパークとしてもかかわりをさらに強めていくことに期待したい。

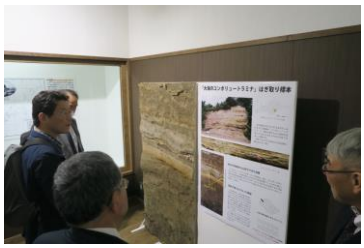
6．解説板やパンフレット、リーフレットはそれぞれ少ない文字量で簡潔にまとめられてはいるものの、ジオストーリーやジオサイトの事象を十分に伝えきれる内容とはなっていない。特に、解説板の内容については、そこで見える地形や露頭の状況をきちんと解説できていないものも散見された。他のジオパークの先進事例を参考にしながら、ジオサイトの位置付けをジオストーリーの中で評価したうえで再整理してほしい。ただし、改訂にあたっては性急に事を進めるのではなく、前述のジオストーリーの再構築を進めるなかで、どうやったら一般の来訪者に島の成立ちや自然・文化とのかかわりなど姫島ならではのジオストーリーを理解してもらえるかの熟議を行うのが先決である。そういった意味で、まずはウェブサイトの改訂から進め、その情報を QR コードなどで誘引するなどで反応をモニタリングしてから改訂するのも一つの方法であろう。

7．新たに常勤の専門員を配置するとともに、拠点施設を新設するなど、推進体制整備の進捗が認められる。今後においては、拠点施設を中心としながらも、事務局がさまざまなステークホルダーを巻き込んだマネジメントを展開することに期待したい。また、広域自治体である大分県が本ジオパークの活動を積極的にサポートしていることは、財政面はもちろん、多面的な事業展開をしていくうえでも効果は大きく、引き続きサポート体制が維持されることに期待したい。ただし、ジオパーク活動の基本はボトムアップであり、県の支援も主体である姫島の住民の自主的な活動が前提であることに留意してほしい。

8．姫島は、「クヌギ林とため池がつなぐ　国東半島・宇佐の農林水産循環」として世界農業遺産に登録されている国東半島４市１町１村の、一区画となっている。ジオパークとの連携はあまりないようだが、農業遺産で評価している姫島の価値は、国東半島とのかかわりという点からも重要であり、今後、ジオストーリーをさらに深めていくうえで積極的に活用していってほしい。

9．拠点施設である「天一根」をはじめ、各ジオサイトや観光スポット、各種施設などに相互に紹介できる案内情報があれば、ツアー客の導線確保が容易となるであろう。また、ジオクルーズは、現在、ジオパークの教育・普及活動として活用している割合が大きいとのことだが、観光コンテンツとしての可能性も高い。引き続きガイドの語りに磨きをかけるとともに、観光ツアーの受け皿の一つとしても検討していってほしい。

H.　行程表

現地審査視察内容・場所	主な対応者	気づいたこと／コメント
1 日目 (2017 年 11 月 3 日)		
ヒアリング・姫島村役場ホール 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 中元　一郎（教育長・推進協議会理事） 後藤　哲郎（姫島中学校長･推進協議会理事） 須股　哲史（姫島小学校長・推進協議会理事） 石田　吉幸（姫島小学校主幹教諭） 吉田　龍夫（ジオガイド） 波戸崎京子（ジオガイド・土産屋店主） 安西千代里（ジオガイド・旅館女将） 竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 山本　章子（大分県東部振興局長・推進協議会理事） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 浜田　みほ（大分県東部振興局地域振興部課長補佐） 角上　寿行（㈱島田組大分営業所長）	事務局、県、学校関係者、お土産店、ガイドから取組み状況の説明を受ける。
拠点施設訪問・時と自然の希跡ジオパーク「天一根」 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 北村　幸子（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 中元　一郎（教育長・推進協議会理事） 竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 山本　章子（大分県東部振興局長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 角上　寿行（㈱島田組大分営業所長）	ワークショップスペースで PR 映像を鑑賞後、展示室を見学。少し情報量が少ないと感じた。もっとジオストーリーをくわしく解説したほうが良い。 コンボリュートラミナの剥ぎ取り標本は良かった。

2 日目 (2017 年10 月 4 日)		
ジオサイト見学・島南側の海食崖 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 山本　章子（大分県東部振興局長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 角上　寿行（㈱島田組大分営業所長） 吉永　佑一（熊本大学大学院自然科学研究科・㈱防災地質研究所主任研究員）	堀内専門員が主に解説。できればガイドの解説が聞きたかった。 指摘事項でも挙げたとおり、解説板の内容が物足りなかった。目の前の事象を説明しきれていない。 「鷹の巣」と「大海の褶曲」はかなり植生に覆われており、何らかの手立てが必要と感じた。
エコカートによるジオサイト案内・島中央部 	吉田　龍夫（ジオガイド） 寺下　　満（姫島エコツーリズム推進協議会長・Tプラン㈱社長）	試験的に導入している 4 人乗りカートで、吉田ガイドの案内を受ける。 主に、島中央部を巡り、島の歴史や暮らしをゆっくりと見て歩いたが、解説は丁寧で分かりやすかった。ジオトの関連も十分とはいえないが意識して話されていた。

ジオクルーズ・フェリーで島一周 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 北村　幸子（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 吉田　龍夫（ジオガイド） 竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 山本　章子（大分県東部振興局長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 角上　寿行（㈱島田組大分営業所長） 吉永　佑一（熊本大学大学院自然科学研究科・㈱防災地質研究所主任研究員）	事前に住民や観光客に告知していたため、数十人規模のクルーズツアーとなった。 堀内専門員と吉田ガイドが交互にマイクで解説を行っていたが、船からは島の地形がよく見えるので、解説の質もあってか島の成立ちや特徴をよく知ることができた。
ジオサイト見学・観音崎、宇部興産跡地 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 角上　寿行（㈱島田組大分営業所長） 吉永　佑一（熊本大学大学院自然科学研究科・㈱防災地質研究所主任研究員）	当ジオパークのメインサイトともいえる観音崎の黒曜石は、露頭までの道がよく整備されていた。天然記念物でありながら、完全には持ち去りがなくならないようで、フェリーターミナルでの啓発告知などに力をいれているとのこと。 村が寄付を受けた宇部興産の跡地利用を相談された。採掘によりよく露頭が見えることから、教育用サイトとしての限定利用を勧めた。
自己評価表ヒアリング・姫島村役場第４会議室	須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査）	自己評価表の中身には触れず、審査の考え方の共有を行った。

3 日目 (2017 年 11 月 5 日)		
エコカーを使った自由散策・姫島灯台ほか 	竹村　惠二（京都大学大学院教授・推進協議会顧問） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 須賀　猛明（推進協議会事務局員） 寺下　　満（姫島エコツーリズム推進協議会長・Ｔプラン㈱社長）	2 人乗りエコカーを運転して姫島灯台までを散策した。 エコカー利用は多いようだが、それよりも 4 人用カートの方が家族連れには良いとのこと。カートは試験走行とのことなので、実用化を期待したい。
講評・姫島村役場ホール 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 中元　一郎（教育長・推進協議会理事） 吉田　龍夫（ジオガイド） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査）	講評では、県との連携についての質問を受けた。県のサポート自体はすばらしく、村の主体性を損なわない範囲で引き続きサポートされることを期待する旨のコメントを発出している。
離島センター見学・土産物店訪問・離島 	藤本　昭夫（推進協議会長） 須賀　雄史（推進協議会事務局長） 堀内　　悠（推進協議会事務局員） 武田喜一郎（推進協議会理事） 中元　一郎（教育長・推進協議会理事） 吉田　龍夫（ジオガイド） 山﨑　吉明（大分県生活環境部自然保護推進室長・推進協議会理事） 梶原　　浩（大分県生活環境部うつくし作戦推進課長・推進協議会アドバイザー） 恒賀健太郎（大分県生活環境部自然保護推進室主査） 吉永　佑一（熊本大学大学院自然科学研究科・㈱防災地質研究所主任研究員）	島を離れるにあたって、３つある土産物店のうちの一つを訪問。 島にはさまざまな特産品があることを再認識。観光客の利用も多いとのことで、ジオパークによる観光振興は期待できると感じた。